昭和7年(1932)　油彩・キャンバス　73.3×100.4cm　三重県立美術館蔵

CHRONICLE OF MIE
VOL.6
【美術編】

「大王岬に打ち寄せる怒濤」

現在の三重県立津高等学校で図画教師として勤めていた藤島武二。上京し、近代洋画界で頭角を現すと、欧州で学び、新たな画風を確立する。広大無辺な海原を描いた本作には、その変化が見てとれる。

山口 泰弘 やまぐち やすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

その頃の私の境遇は、老母と、兄弟をひかえていて、徒食しているのを許さない有様でありましたので、図画の教員となって三重県の中学に赴任することになりました。

藤島武二は、「私の学生時代」という一文に、このように回想を綴っている。鹿児島生まれで、当時東京にいた藤島が図画の助教諭として赴任したのが三重県尋常中学校、現在の三重県立津高等学校で、明治26年(1893)7月のことであった。赴任前の春、藤島は「桜狩」という油彩画を明治美術会第5回展に出品して、雑誌『めざまし草』で森鷗外に称賛されている。この作品は安田善次郎に買取られたものの生活は苦しく、それが奇しくも三重県との所縁を生むこととなった。

明治26年という年は、日本の近代洋画史に画期をもたらした年として記憶されている。フランスに留学していた黒田清輝(1866～1924)が、印象派の画風を携えて帰国し、古風な主題や画風を墨守する明治美術会の洋画家たちに大きな衝撃を与えたからである。黒田の帰国は、近代洋画のその後の航路が大きく舵を切る契機となったばかりか、藤島の将来も左右することになる。

黒田の帰国の影響は、明治29年(1896)5月に東京美術学校に西洋画科の新設、同年9月の白馬会の結成となって現れた。同郷で、面識はないものの滞仏時代に藤島と書簡の往復のあった黒田は、藤島を西洋画科の助教授(当初助手)として推挙する。その理由を黒田は、「私が知っている人の内では、藤島君が一番洋画が巧まかったから」と語っている。こうして足掛け4年ほどの短い三重在住は終わる。

この間の経緯を黒田は同じ年の日記に、「午後天真道場ニ画を直しニ行た　又三重の藤島へ学校の助手ニならぬかと云事を云てやつた」(7月2日)、「今朝三重の藤島から承知の返事が来た」(7月5日)と、淡々と記すのみだが、藤島のほうはというと、7月8日の書簡で、「万事非常之尽力感謝之至に不堪　中学校に於而も此際容易に転任を許さなんだが漸くやつつけてしまつた」と胸のたかぶりを抑えかねている様子がうかがえる。

パリ留学時代の藤島武二

藤島　武二 ふじしま たけじ
1867年～1943年

洋画家。鹿児島県に生まれ、当初、松岡寿・山本芳翠らに学んだ。三重県尋常中学校(三重県立津高等学校)で教鞭を取った後、黒田清輝に招かれて東京美術学校助教授のち教授。白馬会に参加。日本洋画界の中心的存在となった。代表作に、「天平の面影」「芳薫」「黒扇」「大王岬に打ち寄せる怒濤」など。

上京は、人生の転機になったばかりか、画風も一変させることになる。「桜狩」にみられた旧派(藤島が当初出品していた明治美術会は黒田とそのグループの登場でこう呼ばれるようになる)の伝統的な題材と薄暗い色調は払拭されて、明るい外光のもとに輝く小景や陽を浴びて遊ぶ人物が主題となる。黒田を中心としたグループは、新派あるいは外光派と呼ばれるようになり、藤島はその中で頭角を現す。

下って明治38年(1905)、38歳のフランス・イタリア留学は、藤島の画をさらに一変させる。とりわけイタリアで、明るい陽光の下に息づく自然を大胆な筆さばきで描くことを学んだ成果は、藤島の後期の画風展開を決定づけた。その里程標の一つが、V字に大きく開かれた断崖から広く太平洋を見わたす「大王岬に打ち寄せる怒濤」(三重県立美術館蔵)である。

宮内省から御学問所を飾る画の制作を委嘱された藤島は、テーマを「旭日」に決めて、昭和3年(1928)から取材旅行を始める。10年にわたって全国を巡り、果ては内モンゴルにまで赴くことになるが、昭和5年(1930)に旧懐の地である三重県に来て、志摩半島にある大王崎(※)で風景を描いた。2年後、第13回帝国美術院美術展覧会に出品している。

この画には、横幅を数センチ縮めただけで、一見違いの分からない姉妹作(ひろしま美術館蔵)がある。しかし、沖を行く船を水平線にまで遠ざけ、崖にしがみつく松をわずかに上に移すというほんの小さな操作ひとつで、空間を一気に広大無辺に広げることに成功した本作は、藤島の構図感覚の卓抜さを示している。

※地名としては、「大王崎」であるが、作品名として藤島は「大王岬」を当てている。なお当地のランドマークとして知られる灯台は、「大王埼灯台」と表記される。

[左] 藤島武二『桜狩』(明治26年／1893)。関東大震災で焼失したが、20代後半の若い藤島の旧派時代の作風をうかがい知ることのできる貴重な作例。

[中] 大王埼灯台と、眼下に広がる太平洋。

[右] 北川民次(1894～1989)『海への道』(昭和17年／1942 三重県立美術館蔵)。大王崎のある漁村波切は、大正時代、志摩半島の玄関口である鳥羽まで鉄道が延伸して以来、全国各地から多くの画家が訪れた。北川民次もその一人で、家並みと自然が複雑に入り込む景観にインスピレーションを得ている。